宗長作品集

〈日記・紀行〉

重松裕巳編

古典文庫

宗長作品集

〈日記・紀行〉

重松裕巳編

古典文庫

古典文庫第四四三冊

昭和五十八年八月二十日印刷発行　非売品

宗長作品集
<日記・紀行>

編者　重松裕巳
発行者　吉田幸一
印刷者　白橋印刷所

発行所　114
東京都北区西ヶ原三ノ三四ノ一二
電話（九一〇）二七一七
振替口座東京九・一四五九七番
古典文庫

© KOTEN BUNKO, 1983. Printed in Japan

目次

一　凡　例……三
二　本　文……七
宗祇終焉記〈太田武夫氏蔵本〉……七
東路の津登〈太田武夫氏蔵本〉……二五
東路の津登〈彰考館蔵本〉……四一
東路の津登〈伊地知鐵男氏蔵本〉……六五
東路の津登〈太宰府天満宮蔵西高辻家本〉……八九
東路の津登〈祐徳稲荷神社蔵中川文庫本〉……一二五
老のひがごと〈祐徳稲荷神社蔵中川文庫本〉……一四九

宇津山記〈松平文庫蔵本〉……一七五
宗長道之記〈祐徳稲荷神社蔵中川文庫本〉……二〇一
三　異同対照表……二七五
「東路の津登」主要異同対照表
「宇津山記」主要異同対照表
四　発句・和歌索引……二八七
五　解　題……重松裕巳……三〇七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

凡例

一、宗長の作品の中から

宗祇終焉記　太田武夫氏蔵本

東路の津登　太田武夫氏蔵本・彰考館蔵本・伊地知鉄男氏蔵本・西高辻家本・祐徳神社蔵本

宇津山記　祐徳神社蔵本・松平文庫本

宗長道之記　祐徳神社蔵本

の四篇九本をえらび、日記紀行篇と称した。

一、右の四篇は、宗祇終焉記は群書類従五二一、「宗祇旅の記私注」（金子金治郎　桜風社）に、東路の津登は群書類従三三九に、宇津山記は群書類従四八〇に、宗長道之記は群書類従三二六、岩波文庫（島津忠夫「宗長日記」）、古典文庫（鵜澤覺「宗長駿河日記」）などにそれぞれ収録されているので、それらとは別系の底本を供することにした。特

に諸本の異同が著しい「東路の津登」は各系統から一本ずつ計五本を収録した。

一、各篇についてはそれぞれ解題を付したが、先行の解題があるものについてはなるべく重複しないように留意した。

一、翻刻にあたってはなるべく原本に忠実であるように努めたが、概ね次の方針をとった。

イ、原本の異体字宛字漢字のうち使用頻度の高い「斗　共　爰　云」のほかはすべて現行の活字に改めた。

ロ、原本の片仮名は漢文体の送り仮名（祐徳神社蔵本「あつまのつと」）と、朱筆書き入れ（松平文庫本「宇津山記」）とを除きすべて平仮名に改めた。

ハ、原本の仮名遣いや漢字の誤り、脱字、傍注、ミセケチなどはそのままとし、著しい誤脱に限って当該個所の右傍に（ママ）の注記を施した。

ニ、別筆又は朱筆の書き入れは＜　＞でかこんでこれを示した。

ホ、「東路の津登」の書名は通称の書名に統一した。

へ、読み易くするために私に濁点句読点・点を施した。
一、連歌、和歌、歌謡は別行に、二行書きの和歌は一行に改めた。
一、巻末に「東路の津登」「宇津山記」の主要異同対照表を掲出した。
一、巻末に発句、和歌の索引を付した。

二　本　文

「宗祇終焉記」

太田武夫氏蔵本

此为试读,需要完整PDF请访问: www.erton

宗祇老人、年ごろの草庵も物うきにや、都のほかのあらましせし年の、春のはじめの発句に、

身やことしみや古をよ所の春がすみ

その秋の暮、こし地のそらにおもむき、此たびは帰る山の名をだにおもはずして、越後の国にしるたよりをもとめふたとせばかりをくられぬと聞て、文亀はじめの年六月のすゑ、駿河の国より一歩をすゝめ、あしがら山をこえ、富士のねを北にみて、伊豆の海、沖の小嶋によるなみ、こゆるぎの磯をつたひ、鎌倉を一見せしに、右大将家のそのかみ、又九代のさかへも、たゞ目のまへのこゝちして、鶴が岡のなぎさの松、雪のしたのいらかは、げに岩清水にもたちまさるらんとぞ覚侍る。山〻のたゝずまひ、やつ〳〵のくま〴〵、いはゞ筆の海もそこみ

えつべし。こゝに八・九年のこのかた、山のうち、あふぎのやつ、鉾楯の事出来て、八ヶ国二かたにわかれて、道行人もたやすからずとはきゝしかど、こなたかなたしるつてありて、武蔵野をも分過、上野をへて、長月朔日比に、越後の国府にいたりぬ。宗祇げざんにいりて、年月へだゝりぬる事など打かたらひ、みやこへのあらまし侍る折しも、ひなの長路のつもりにや、身にわづらふ事ありて日数になりぬ。やう〳〵神無月廿日あまりにおこたりて、さらばなど思ひ立ぬるほどに、雪風はげしくなれば、ながはまのなみもおぼつかなく、あらちの山もいとゞしからんといふ人ありて、かたのやうの旅宿をさだめ、春をのみまつ事にしてあかしくらすに、大雪ふりて日比つもりぬ。この国の人だに、かゝる雪にはあはずと侘あへるに、ましてたへがたくて、あ

る人のもとに、

おもひやれ年月なるゝ人もまたあはずとうれふ雪のやどりを

かくて、しはすの十日、巳刻ばかりに、地震大にして、まことに地をふりかへすにやとおぼゆる事、日にいく度といふかずをしらず。五日六日打つゞき、人民おほくうせ、家〻ころびたうれにしかば、旅宿をだにさだかならぬに、又思はぬやどりをもとめて年を暮ぬ。元日には、宗祇夢想の発句にて連歌あり。

としや今朝あけのいがきの一夜まつ

此一座の次に、

この春を八十にそへて十とせてふみちのためしや又もはじめむ

と賀し侍りし。返し、

いにしへのためしにとをき八十だに過るはつらきおひのうらみを

おなじき九日、旅宿にして一折つかうまつりしに、発句に、

青柳もとしにまさきのかづら哉　宗祇

此暮より、又わづらふ事さえかへりて、風さへくはゝり日数へぬ。きさらぎの末つかた、おこたりぬれど、都のあらましは打をきて、上野国草津といふ湯にいりて、駿河国にまかり帰らんのよし、おもひ立ぬといへば、宗祇老人、我も此国にしてかぎりを待侍れど、いのちだにあやにくにつれなければ、こゝの人々のあはれみも、さのみはいとはづかしく、又都に帰りのぼらんも物うし。美濃国にしる人ありて、のこるよはひのかげかくし所にもと、たび〳〵ふりはへたる文あり。あはれともなひ侍れかし、富士をもいま一度見侍らんなどありしかば、

打すて国にかへらんも、つみえがましくいなびがたくて、信濃路にかゝり、ちくま川の石ふみ渡り、菅のあら野をしのぎて、廿六日といふに草津といふ所につきぬ。おなじき国に、伊香保といふ名所の湯ありし。中風のためによしなど聞て、宗祇はそなたに赴て、二かたになりぬ。此湯にて煩そめ、ゆにおるゝ事もなくて、五月のみじか夜をしもあかし侘ぬるにや、

いかにせむ夕付鳥のしだり尾に声うらむよの老のねざめを

文月のはじめには、武蔵国いるま川の渡り、上戸といふ所は、いま山の内の陣所なり。爰に廿日あまりがほどやすらふことありて、数奇の人おほく、千句の連歌なども侍し。みよしのゝ里、河越にうつりて十日あまり有て、おなじき国江戸といふ館にして、すでにいまはのやう

にありしも、又とりのべて、連歌にもあひ、気力も出くるやうにて、鎌倉ちかき所にして、廿四日より千句の連歌有。廿六日にはてぬ。一座に十句十一句など、句かずも此比よりはあり。おもしろき句もあまたぞ侍し。此千句の中に、

けふのみとすむ世こそとをれ

といふ句に、

八十までいつかたのしみ暮ならむ

としのわたりはゆく人もなし

老のなみいくかへりせばはてならむ

思へば、いまはのとぢめの句にもやといまぞおもひあはせ侍る。廿七日、八日、此両日こゝに休息して、廿九日に駿河国へと出たち侍るに、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton